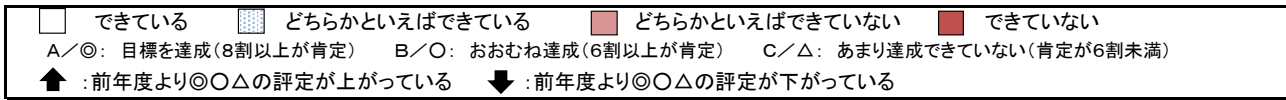
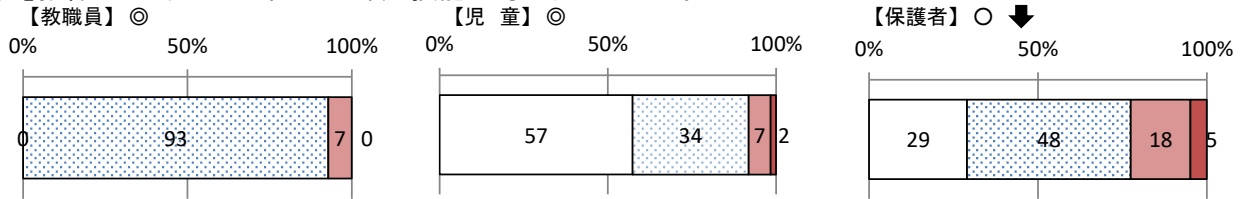


令和5年度学校評価

上島町立弓削小学校



【A】指標1 基礎的・基本的な知識・技能が身に付いている。



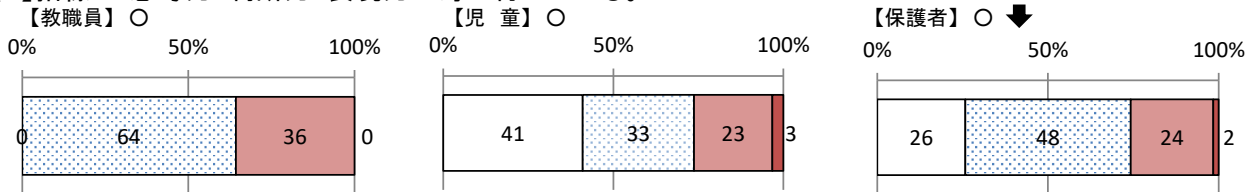
【分析】

児童と保護者の結果は昨年度と同程度である。教職員の積極的肯定意見(「できている」)は27ポイント下がって0%になった。保護者の否定的意見(「どちらかといえばできていない」と「できていない」を合わせたもの)も、初めて20%を上回った。教職員・児童・保護者の三者とも基礎的・基本的な知識・技能の定着に不安を感じていることがうかがえる。他の小学校との比較ができる学力テスト(愛媛県学力診断調査、上島町標準学力調査、県10分間テスト等)の結果を見ても、本校の平均点は全国平均・県平均より低い傾向が続いている。

【改善方策】

基礎的・基本的な知識・技能の定着に向けて、一人一人の苦手なところや身に付いていないところを把握し、個に応じた指導を継続・強化していく。その際に形式的な反復学習ではなく、学ぶ意欲を高める視点からの授業改善に努め、できる喜びや分かる楽しさを実感させることを大切にす。一人一人に応じた目標を設定したり、学習形態や学習方法を工夫したりしながら、主体的な学びの中で基礎的・基本的な知識や技能が身に付くように指導法や教材・教具を工夫していく。

【B】指標2 思考力・判断力・表現力が身に付いている。



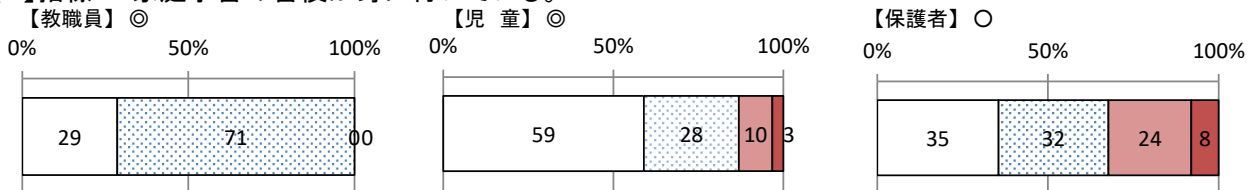
【分析】

教職員と保護者は、昨年度と比べて積極的肯定意見が減少するとともに否定的意見(「どちらかといえばできていない」と「できていない」を合わせたもの)も10ポイント近く増加した。このことにより、教職員・児童・保護者の三者とも否定的意見が3割前後を占めた。思考・判断・表現といった活動は基礎的・基本的な知識・技能を活用して行われるため、基本的な知識・技能の定着が不十分だと活動の充実が難しい面もある。

【改善方策】

基礎的・基本的な知識や技能の確実な定着に重点を置きつつ、身に付けた知識や技能を活用した学習(思考力・判断力・表現力を高める学習)も積極的に進める。そのことが結果として基礎的・基本的な知識や技能の定着にもつながっていくと考える。また、教科の学習だけでなく特別活動を始めた日常の場においても、自分の考えを持つことや自らが選択・判断すること、自分の考えを表現することなど、互いの考えや集団の考えを発展させることを目指した協働的な活動を進めていく。

【A】指標3 家庭学習の習慣が身に付いている。



【分析】

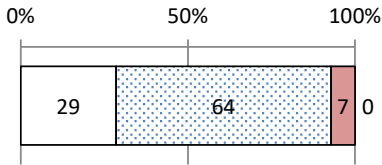
児童は昨年度と同程度であるが、教職員は積極的肯定意見が9ポイント減っている。しかし否定的意見も8ポイント減少した。保護者は積極的肯定意見が14ポイント増え、否定的意見も4ポイント減っている。全体的には改善傾向にあると思われる。しかし、前年度と同様に3人に1人の保護者が家庭学習に対して十分だとは思っていない。

【改善方策】

家庭学習の習慣を定着させるために、年度始めの学級PTAで「家庭学習の手引き」を使って話し合いを行い、家庭学習についての共通理解を図る。そして、学校と家庭とが協力して家庭学習の習慣づくりを目指していくことを再確認したい。また、学習習慣の形成には児童の意識付けが必要である。学校では時間の使い方や家庭学習の大切さを理解させることに引き続き努めるとともに、日々の授業を通して自ら進んで学習に取り組む態度を育てていきたい。

【A】指標4 教科等の学習において文章にまとめる、全体で発表するといった言語活動を積極的に取り入れている。

【教職員】◎



【分析】

昨年度と比べて大きな変動はない。ペアやグループ、全体での話合いや伝え合いといった言語活動を授業の中に取り入れようと努めていることが分かる。ただ、積極的肯定意見は少なく、否定的意見もあることも見逃せない。学習したことをまとめたり発表したりすることは、思考力・判断力・表現力の育成と密接に結び付いており、基礎的・基本的な知識や技能の定着ともつながっていることから、さらなる充実が求められる。

【改善方策】

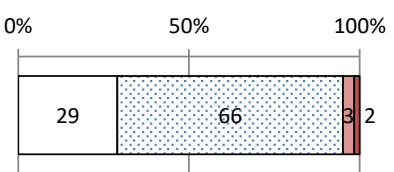
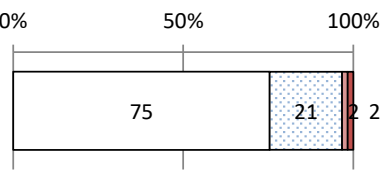
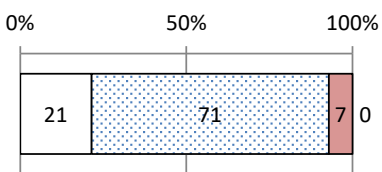
引き続き、ペアやグループ、全体での話合いや伝え合い等の言語活動を学習の中に積極的に取り入れていく。今年度は、週1回「むげんタイム」の時間に短作文を書く活動を全校で実施した。最初は何を書いてよいか分からず戸惑っていた児童も多かったが、回を重ねるごとに自分の思いや考えを文章に表すことができてようになってきた。今後も続けていきたい。

【A】指標5 児童一人一人の力を伸ばすため、個に応じたきめ細かな指導の充実にも努めている。

【教職員】◎

【児童】◎

【保護者】◎



【分析】

昨年度と比較すると、教職員と児童の数値は変わらないが、保護者の否定的意見が13ポイントも減少している。肯定的意見は95ポイントまで上昇しており、保護者は、教職員が一人一人の特性に応じて指導してくれていると感じている。しかし基礎的・基本的な知識や技能は充分定着していない。ここに本校の新たな課題が感じられる。

【改善方策】

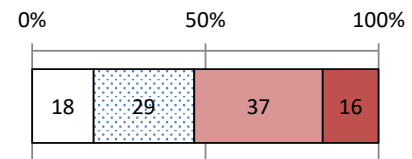
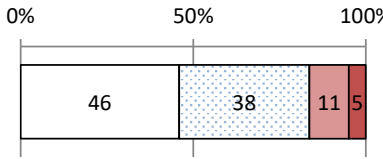
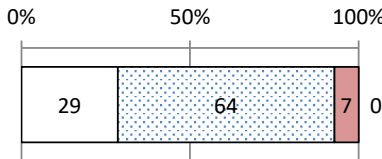
個に応じた適切な指導を図るために、現在も取り組んでいる特別支援教育の視点を生かした指導やICT機器の効果的な活用方法などの研究を進めていく。また、複数の教職員が協力して授業を行ったり個別指導を取り入れたりするなど、指導体制の工夫にも努めたい。一人一人をよく見取ることで、つまずきが見られる児童への理解を深め、個々の学習状況に応じて到達度の設定に柔軟性を持たせるなど、きめ細やかな指導や支援を引き続き心掛けたい。

【B】指標6 読書習慣が身に付いている。

【教職員】◎ ↑

【児童】◎ ↑

【保護者】△



【分析】

年々、数値が悪化してきている項目であった。しかし本年度は教職員の肯定的意見が16ポイント上がり、児童の肯定的意見は21ポイントも上昇した。電子図書館(タブレットで電子図書を読むことができる機能)の導入、学校司書・図書サポーター・図書委員会の積極的な活動等が児童の読書習慣の形成につながっていると思われる。一方で、家庭における読書の不振は続き、保護者の否定的意見は7ポイント増加した。家庭における読書習慣の形成が大きな課題となっている。

【改善方策】

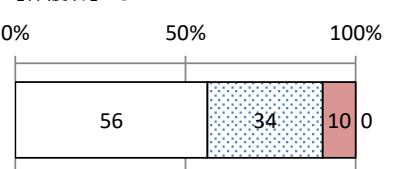
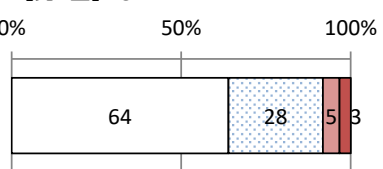
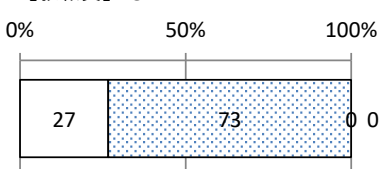
学校においては、現在の取組を継続・発展させることで、更なる読書習慣の形成につなげていく。一方家庭では、宿題や習い事、ゲームや動画視聴、友達との遊びや様々な用事など、読書よりも優先されるものが多い。その中で読書時間を確保するには、学校の朝読書のように時間や場所を決めて親子で読書をするという方法や、一緒に図書館・本屋に行くなどの具体的な取り組みが必要になる。「読書をしなさい」と繰り返すだけでは効果は見込めないと感じる。

【A】指標7 思いやりのある児童が育っている。

【教職員】◎

【児童】◎

【保護者】◎



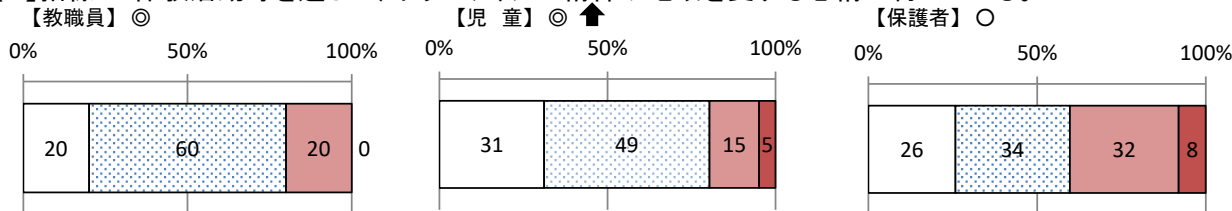
【分析】

昨年度と比べて大きな変化はない。教職員・児童・保護者の9割以上が「思いやり」があると感じている一方で、思いやりのない言動が気になっている児童・保護者も1割程度いる。昨年度も述べたように、相手の気持ちを理解することに課題がある児童を「思いやりがない」と捉えるのではなく、一人一人の特性を教職員・児童・保護者が正しく理解した上で指導や支援を行っていかねばならないと考える。

【改善方策】

学校では思いやりのある児童を育成するために、自分と異なる他者と関わる教育活動を多く取り入れている。掃除、遊び、遠足、集会などを縦割り班活動で行い、異学年交流も積極的に実施してきた。今年度は、地域でお世話になっている方々を招いて「ふれあい給食」を行ったり、人権集会を開催したりして、一人一人が人権や思いやりについて考えるよい機会ともなった。今後も、こうした取組を継続していきたい。

【A】指標8 体験活動等を通じて、ボランティアの精神や地域を愛する心情が育っている。



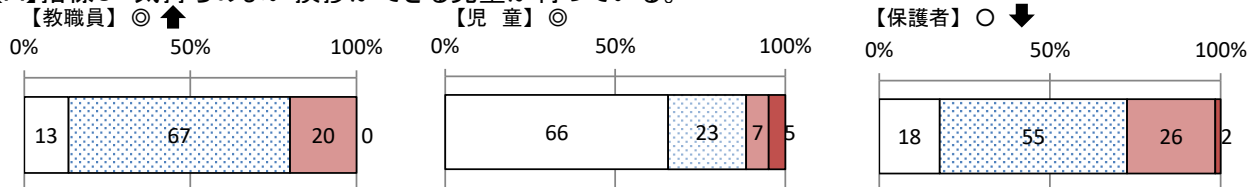
【分析】

教職員と保護者の否定的意見がそれぞれ5ポイント程度増え、毎年全体的に数値を下げてきている。例年と同じ規模・内容で地域学習・体験学習を進めてきているが、積極的・創造的な活動の展開までは至っていない。教職員にとっては日々の授業や教育活動をこなしていくことで精一杯だという現状もある。

【改善方策】

これまで同様に弓削の自然・人・文化等と触れ合う地域学習・体験学習を積極的に進めていく。そして地域コーディネーターと連携しながら新しい取組を模索していく。その際、地域から学ぶことにとどまらず、地域に発信したり貢献したりする活動を重視し、児童自らが地域学習・体験学習に有用感や効力感を感じられるようにしていきたい。

【A】指標9 気持ちのよい挨拶ができる児童が育っている。



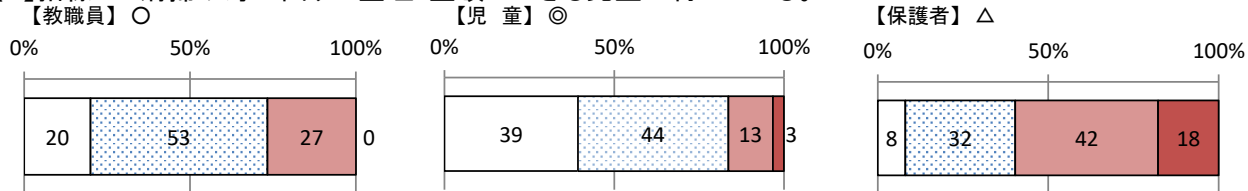
【分析】

昨年度と比べて大きな変化はない。昨年度と同様に9割の児童は挨拶がよくできていると感じている一方で、教職員と保護者はそれほどできているとは受け止めていない。本年度も「気持ちのよい挨拶」の捉え方のずれを埋めることはできなかった。

【改善方策】

「気持ちのよい挨拶」とはどういう挨拶なのか、児童が充分理解できていないと考えられる。教職員や保護者などの大人が手本を見せるつもりで「気持ちのよい挨拶」を心掛けることから始めていくと効果が期待できる。今後も、よい手本を示しつつ粘り強く指導に当たりたい。

【B】指標10 清掃や身の回りの整理・整頓ができる児童が育っている。



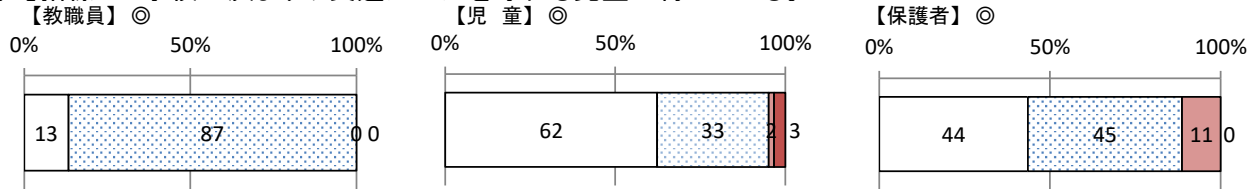
【分析】

昨年度と大きな変化はない。保護者が肯定的に捉えた割合は40%しかなく、アンケートの中で最も低い評価となった。一方、児童の肯定的に捉えた意見は83%と高く、保護者と児童の捉え方に大きな差が見られる。教職員の評価が児童の評価に近いことから、学校における指導の下では清掃や整理・整頓がある程度できているが、家庭の中では整理・整頓の習慣化が図られていないことがうかがえる。

【改善方策】

学校生活の中では整理・整頓や清掃活動が決まった時間・手順で行われており、言われなくてもできる条件が整っている。しかし家庭生活になるとそうもいかない。今後は学校生活で学んだことが家庭生活でも生かされることを目指し、身の回りの汚れや乱れに気付かせるような言葉掛けを増やしていきたい。また、雑巾の絞り方や掛け方、ほうきを使ったごみの集め方など、細かな掃除の技能もしっかりと身に付けさせたい。

【A】指標11 学校の決まりや交通ルールを守る児童が育っている。



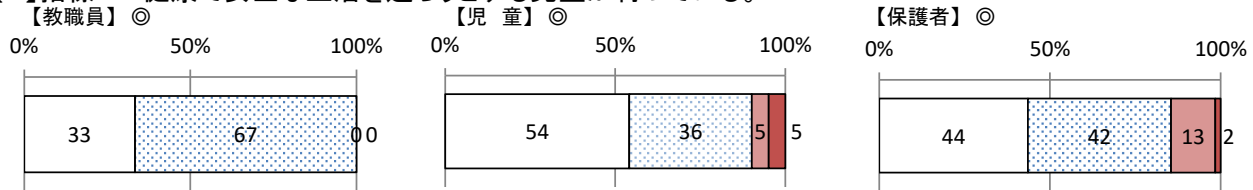
【分析】

昨年度は教職員の2割が否定的に捉えていたが、本年度は全員が肯定的に捉えている。児童と保護者の数値に変化はない。しかし、積極的肯定意見だけを見ると、児童・保護者と教職員の割合には大きな違いが見られる。児童・保護者は決まりやルールをしっかり守っていると思っているが、教職員は十分ではないと感じている。

【改善方策】

価値観や生活様式等の多様化によって、何でも一律に指導することが難しい時代である。教職員はそのことを強く自覚し、児童や保護者の様々な意見や考え方に対して柔軟に対応していく能力を磨いていく必要がある。また、この数年、学校の決まりやルールを随分と見直してきた。今後も、社会の流れや本校の実態を踏まえて見直しを進めていくとともに、徹底しなければならないことは何かということを経験者・児童・保護者で確認する機会を持つことができればと思う。

【A】指標12 健康で安全な生活を送ろうとする児童が育っている。



【分析】

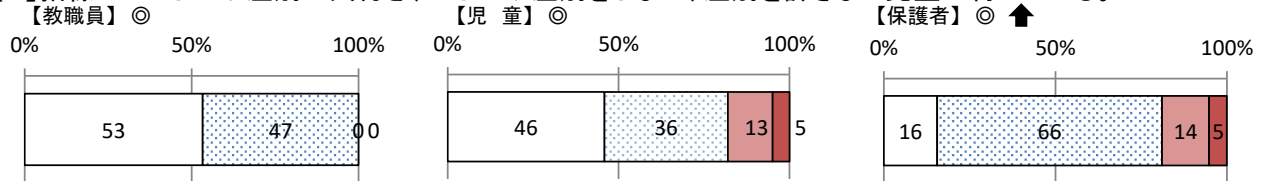
教職員の否定的意見は0%だが、児童と保護者の1割は否定的に捉えており、数値もやや増えている。多くの児童が健康で安全な生活を送ることができていると感じている一方で、健康面や安全面で不安や心配を抱えている児童・保護者がおり、丁寧なサポートが求められる。

【改善方策】

健康については、児童が自身の健康面に関心を持てるよう、身体計測や健康診断の事前・事後の情報発信や円滑な実施になお一層努めていきたい。また「保健だより」や保健室前掲示、保健関係行事等、健康な生活について学ぶ機会を充実させ、児童の意識を高めていきたい。

安全な生活については、保健室へ来室した児童への指導等、個別対応を丁寧に実施していく。全体に対しては、けがの多い場所やけがの原因等について収集・分析した情報を積極的に提供する。そのことにより、けがの予防や安全な行動について、自ら考え、自ら気付くことができるようにしていきたい。

【A】指標13 いじめや差別に気づき、いじめや差別をしない、差別を許さない児童が育っている。



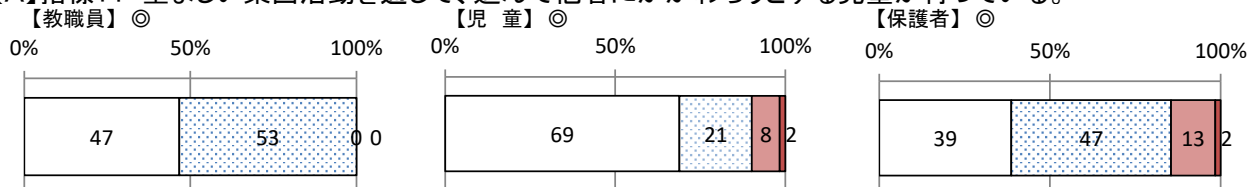
【分析】

いじめや差別に対する教職員の意識は高く、いじめや差別をなくそうと指導に努めていることがうかがえる。しかし、児童と保護者の約2割が否定的に捉えており、学校の対応や現状に満足できていない。ただ、いじめや差別は年々複雑化してきており、厳しい指導が事態の悪化を招いてしまうことも多い。固定化された人間関係の下、どのように子ども同士・保護者同士のよりよい関係を築いていくかが本校の大きな課題の一つである。

【改善方策】

「いじめや差別は許さない」と加害児童を強く責めるだけではいじめや差別はなくなる。児童と同じ目線に立って「いじめや差別は心の弱さが原因であり、心の弱さは誰もが持っている」と捉えることから始め、道徳科の授業を中心にして粘り強く丁寧な指導を行っていく。また、複雑化するいじめや差別への対応策の一つとして、不安を一人で抱え込むことなくすぐに周りの人に相談できる関係づくりや体制づくりも構築していかなければならない。

【A】指標14 望ましい集団活動を通して、進んで他者にかかわろうとする児童が育っている。



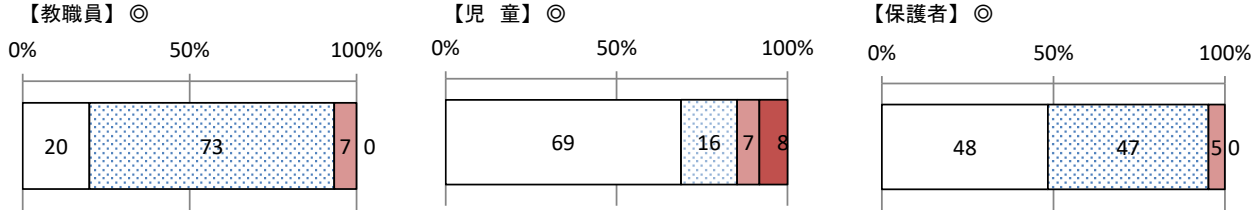
【分析】

昨年度は全員の児童が肯定的に捉えていたが、本年度は1割の児童が否定的意見となっている。保護者も15%が「進んで他者に関わるのが難しい」と答えており、コミュニケーションに課題を感じていて他者とうまく関わりが持たないことに困っている児童や保護者が一定数いることがうかがえる。

【改善方策】

指標7のところでも述べたように、児童主体の集会や縦割り班活動を充実させ、他者と関わることの楽しさを感じさせたり、他者と関わることの意味や価値に気付かせたりする指導に努めていく。また、教師が児童の活動の様子を見取り、成長を認める声掛けや今後の活動への励ましを行っていく。活動後は振り返りを通して自身の成長を確かめたり、互いのよさを確認したりすることで、互いに認め合える集団づくりを目指したい。

【A】指標15 児童との信頼関係の構築に努めている。



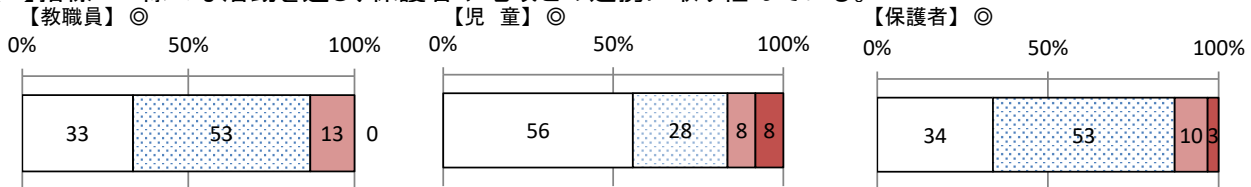
【分析】

本年度は、児童の積極的肯定意見が11ポイント増加し、保護者の否定的意見が6ポイント減少した。全体的な数値はよくなってきている。しかし、否定的に捉えている児童が15%もいることが気になる。ただ、児童用アンケートでは「学校に行くのは楽しいですか」という文面がこの指標における評価の根拠になっている。学校が楽しくない原因には、教師との信頼関係だけでなく、学習面や児童同士の人間関係、発達への不安、家庭内の様々な事情など、個人的・複合的な理由があるとも考えられる。

【改善方策】

児童全員に「学校が楽しい」と感じてもらいたいというのは教職員・保護者の強い願いである。一方で児童の不安に対して過剰に反応し、過保護に関わりすぎると、困難を自分で乗り越えていく力が身に付いていかない。児童一人一人が何に困っているのか、何を不安に感じているのかを理解し、助けるか見守るかを慎重に判断し、教職員と保護者が協力して児童に関わっていく姿勢をこれからも大切にしたい。

【A】指標16 様々な活動を通し、保護者や地域との連携に取り組んでいる。



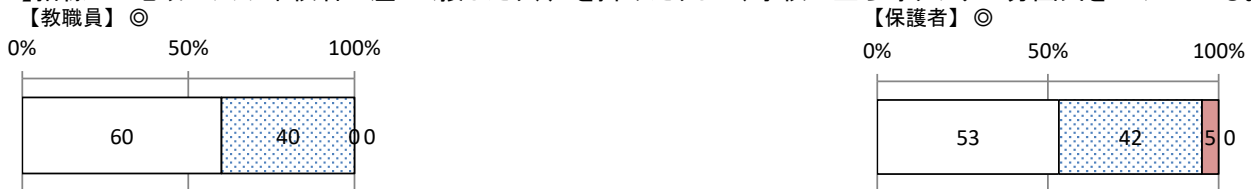
【分析】

教職員の否定的意見が6ポイント増加し、保護者の否定的意見は6ポイント減少した。児童の数値に大きな変動はない。全体的には1～2割が否定的意見を持っている。コロナ禍を経て、保護者や地域と連携した活動が以前のように行われている。しかし、時代とともに学校の在り方も変容していく中で、どのような行事や活動を行い、どのように保護者や地域と連携して、どのような学校をつくっていくかが、本年度も課題として残った。

【改善方策】

今後も地域に根差した特色ある教育を推進していくために、地域学習の充実を図るとともに様々な活動において諸機関と協力し、保護者や地域の力を最大限生かした学校づくりを推進する。そして学校運営協議会とともに学校・家庭・地域が一体となった「開かれた信頼される学校づくり」に一層努めていく。

【A】指標17 地域の人や来校者に温かく接したり、声を掛けたりして、学校に立ち寄りやすい雰囲気をつくっている。



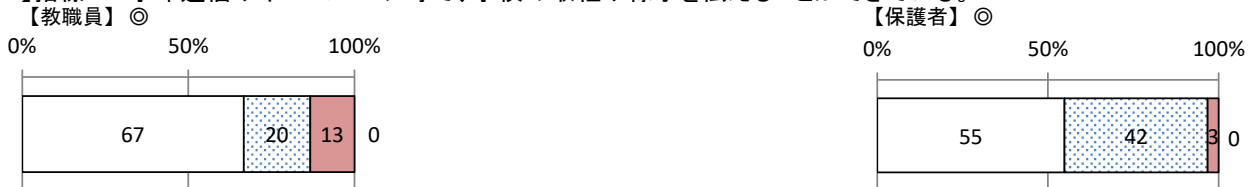
【分析】

ほとんどの保護者は肯定的に捉えていることから、多くの保護者にとって学校は立ち寄りやすい雰囲気をつくっていると考えられる。しかし全員の保護者にとってそうでなく、一部の保護者にとっては立ち寄りにくいと捉えられている。

【改善方策】

来校時の対応については保護者から高い評価が得られている。今後も来校者に接するときは表情や言葉遣いに細心の注意を払うように努めていく。

【A】指標18 学年通信やホームページ等で、学校の取組や様子を伝えることができている。



【分析】

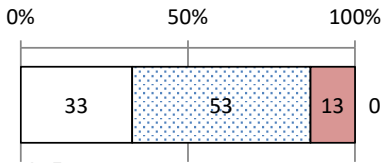
97%の保護者が肯定的に捉えており、学校からの情報発信に一定の評価が得られている。一方で教職員の否定的意見が13%あり、学校の取組がまだまだ十分伝わっていないと感じている。

【改善方策】

学校ホームページを通しての情報発信や、マチコミメールのタイムライン機能を活用した修学旅行や自然の家の様子報告等、多くの保護者や教育関係者の方から好評価をいただいている。無理のない範囲で現在の取組を継続していきたい。マチコミメールについては、行事予定の変更などのお知らせの他に、欠席連絡機能も使えるようにした。よりよい活用の在り方を今後も検討していきたい。一方、学校便りや学年通信については、まだまだ工夫の余地が残されているように感じる。学校から一方通行の情報提供ではなく、学校と保護者が双方向にやりとりできるような情報共有の方法を模索したい。

【C】指標22 自己研修に努めるとともに、校内・校外研修にも意欲的に参加している。

【教職員】◎



【分析】

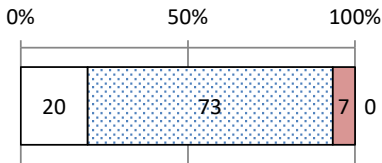
今年度は、本校で東予地区人権・同和教育研究協議会が開催されたことを機に、人権・同和教育及び道徳科について研究・研修を深めることができた。校外研修についてもそれぞれが積極的に参加し、教職員としての資質を高めようと努めている。

【改善方策】

今後も全校での研究授業を積極的に行い、教職員の授業力向上を図るとともに、本校の研究テーマに基づいた研修を進めていく。また、基礎研修や自己研修を通して得た研修内容を校内研修の時間に全職員で共有し、更に教職員としての資質を高めていきたい。

【A】指標23 学校の教育目標の具現化に向け、教育計画の立案・実践・評価・改善を行うことができている。

【教職員】◎



【分析】

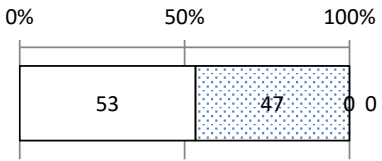
昨年度と比べ、肯定的意見が13ポイント上昇した。教育目標の具現化に向けて、各計画がしっかりと立案・実践・評価・改善できていることがうかがえる。

【改善方策】

昨年度に課題として挙がっていた「教育活動の評価と改善」については、全教職員ですみやかに活動を評価し、改善点を明確に示して確実に引き継ぐことができている。今後も、学校の教育目標の実現を目指して各計画の立案・実践・評価・改善を行っていきたい。

【A】指標24 報告・連絡・相談を密にして、組織として問題に対応することができている。

【教職員】◎



【分析】

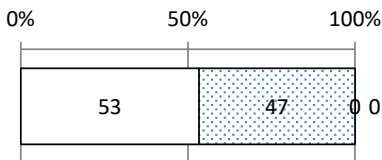
昨年度に比べて肯定的意見が13ポイント上昇し、100%になった。昨年度の課題を改善し、学校で発生する諸問題に組織として対応できていると思われる。

【改善方策】

教職員間の情報共有にはまだまだ改善の余地がある。本年度は職員朝礼を毎朝から週1回に減らしたことによって、情報共有の場の減少が課題として残った。ICT機器を活用するなど、他のツールを代用するなどして更なる共通理解を進めていきたい。

【A】指標25 管理規則に基づき、適切に情報管理できている。

【教職員】◎



【分析】

管理規則に基づき、適切に情報管理ができていると考えている。

【改善方策】

今後も様々な研修を通して教職員の情報管理への意識を高めていく。